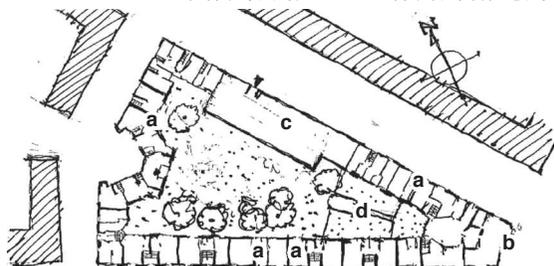


エイヘン・ハルトの集合住宅 1919年～1923年 M.デ・クレルク

ブリッツ・ジードルング 1925年～1930年 ブルーノ・タウト/マルティン・ワーグナー



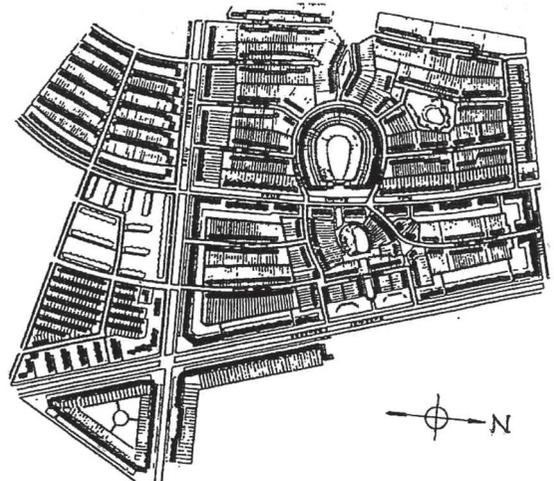
エイヘン・ハルト住棟北東面外観 左から郵便局、集合住宅、学校



エイヘン・ハルト住棟平面図 a集合住宅 b郵便局 c学校 d集会所



ブリッツ・ジードルング 馬蹄形エリア中央部分と住棟



ブリッツ・ジードルング全体配置図 敷地面積110.2ha 全1963戸

戦間期の集住空間

これまで、20世紀に入ってから設計されて現存する建築の中から、空間構成の発展と展開に貢献した欧米の単体建築を年代順に22選び、論評してきたが、連載残りの2回を、集合住宅群と日本の建築に当て、補うことにする。

戦間期の欧州では都市への人口集中があり、ウィーンのカール・マルクス・ホフなど諸都市に優れた集合住宅群が多く建設された。日照と標準重視の住棟平行配列へ移る直前の時期だ。その中から二つを採り上げる

アムステルダムのエイヘン・ハルト集合住宅は中央駅の西北側市街に位置する。設計はM.デ・クレルク。公園を挟む矩形2ブロックと鉄道線路沿いの鋭角的な2等辺3角形のブロックからなる街区構成型。注目はその3角形のブロックで、5階建て階段室型103戸の住戸の他に郵便局と小学校を収め、中庭に集会所を備えているのが特色だ。

煉瓦貼の外壁は一部うねり、シンボリックな塔が建つなど表現豊かで、機能性重視の建築家に批判された。だが、空間構成は合理的で、方位に着目すると、日照を得にくい北東棟に小学校を収め、鋭角の街角部分を2層にして郵便局に当てている。各々窓の形状が異なり、屋根を葺き下すなどその表情は内部機能の表出であると共に都市空間としての街路の内壁でもあり、街並を豊かにしている。

一方、タウト設計のブリッツ・ジードルングはベルリン郊外の団地である。中央の馬蹄形の棟は半地下と屋根裏を持つ3階建て。その南北には勾配屋根付きの2階建てテラスハウスを両側にともなう道路が数条ずつ伸びている。主要幹線沿いは4階建てである。

馬蹄形に囲まれたエリアは何かに使う広場ではない。中央に小さな池がありそれを高木が囲んでいる。氷河期に削られた窪地なのだ。それを場所の記憶として遺し、鎮守の森のように団地の精神的な中心にしている。テラスハウスの住棟間は離れていて中心線上に背割り通路が貫く。住棟までの土地は私的なクライン・ガルテンで埋め尽くされ、菜園や花壇は手入れが行き届き、住民が生活をいつくしみ楽しんで様子か濃密に伝わってくる。

住戸はすべて階段室型だが、協同組合員の具体的な居住者に合わせ、複数のプランが用意され、多様な家族の生活に対応し、住み継がれてきた。

この2都市と共にロッテルダムやフランクフルトなどのこの期の集合住宅群は近いうちに建設100年になる。その多くが現役で、大事な空間遺産になっている。